

Title	進行形の原理
Author(s)	沖田, 知子
Citation	Osaka Literary Review. 19 P.1-P.14
Issue Date	1980-11-30
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25629">https://doi.org/10.18910/25629</a>
DOI	10.18910/25629
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 進行形の原理

沖田知子

英語進行形については、今までにも多くの学者が研究しているものの、未だにその basic meaning をめぐって統一の見解に達しているとは言い難い。少なくとも伝統的な「継続相」観では一筋縄ではいかない例が次々と提出されている。この小論では、もう一度進行形について、どうしてその様な用法が可能となるのか、その根底にある原理について少し考えてみたい。具体的には Van der Laan の進行形論の吟味から、それが例えば、毛利(1980)で新しく提示された進行形の意味論的、語用論的研究とどうつながっていくのかという展望が得られれば幸いである。

いわゆる伝統文法家達の後に、Hatcher は、1951年に発表した論文で、単純形と進行形の交替現象に着目、究明した。それは、自ら a new approach と冠した様に、進行形の研究に新しい展開をもたらすこととなった。

- (1) In reference to a single present occurrence, the progressive is the norm for all verbs that describe overt or developing activity or both, as well as for those verbs of non-overt, non-developing activity that stress of themselves (1) the effect of the activity on the subject, (2a) his absorption in activity, or (2b) the results or aims of this activity — emphases that may be summarized in the label 'involvement of the subject'; the simple form is the norm for all the rest — i.e. for those verbs of non-overt, non-developing activity which do not stress the involvement of the subject. (p. 279)

進行形用法の「最小公分母」として、「明白もしくは進展的活動か、主語が関与」を考えている。Hatcher の論文を 'A classic article on the subject' と評した Leech は、その著書 *Meaning and the English Verb* において、更に詳しい動詞の意味による分類を行い、それと進行形との共起

関係を研究している。また、Dagut (1977) では、Hatcher の論に ‘subjectivity’ という概念を大幅に導入している。

- (2) the fundamental feature of *aspect* as here defined (V/*be* + V-*ing*) is its “subjectivity”; that is to say, the selection of one or other of the aspect forms depends primarily on the speaker’s intention, on *how the speaker regards* the event rather than on the supposed actual nature of the event itself. (p.51)

話者の意図意識という観点を強調している。

一方、細江逸記は、『動詞時制の研究』で従来の時間を考慮した通説に挑戦している。

- (3) さて、この語形が動作の進行を表わすとか、または時間の連続を表わすという世俗一般の見解は、場合により、ある程度条件付きには認められるが、本質的には誤解である。 (p.91)

つまり、「動詞の Tense は本来思想様式の区別を表わすもの」という考えに基いて、進行形を『集注叙述』の語形としている。この独特な細江時制論は別としても、Van der Laan により「ある程度まで類似の考え」が展開されている。これは注意集中形式に関してであるが、Van der Laan は、心理学的基礎をふまえて、次の様に述べている。

- (4) 「進行中」という言葉は、直接観察 (Direct Observation) を意味し、直接観察とは単なる知覚よりも大いに意味深長であるという事実を吾々は通例看過しているのである。吾々があることに興味を持つごとに、つまりあるものが吾々の注意を喚起するごとに、吾々の知覚は変じて意識的観察となる。 (p.20) <sup>1)</sup>

しかし、ここで強調しておかなければならないのは、細江説の様な時間概念排除はなく、むしろその底流には時の意識があるという決定的な違いである。更に Van der Laan は進行中の用法を考えるにあたって、次の要素を考える。

## (5) 1. 進行中の動作の性質

## 2. 観察者の心

(p.20)

換言すれば、観察されるものと観察するものである。ここに、Hatcher, Leech, Dagut らの進行形研究につながる考え方を窺うことができる。

進行形をめぐる比較的新しい研究を簡単にみてきたが、ここではまずそれらの原点とでもいべき Van der Laan を中心に考えてゆきたい。彼の主張する直接観察の対象となる進行中の動作の性質は、Leech (1971) で詳しく吟味されている。また毛利 (1972) では次の様に述べている。

- (6) 現在、目の前で進行している動作を記述するには現在進行形を用いると言うのは原則的に正しい説明であるが、それは完結動詞 (Conclusive verb) ——その時その時で完結する動作、あるいは、自分の意志でやめようと思えばやめられる動作をあらわす動詞——に限るのである。(中略) 一方、完結動詞以外の動詞、すなわち、性質、知識、感覚、感情などをあらわす、非完結動詞 (Non-conclusive verb) は、現在進行中の動作をあらわすにも現在単純形を用いる。

(pp.174~5)

勿論、この分類が固定的でないところが、従来から論議を呼ぶこととなったわけである。少なくとも、動詞(句)の意味と進行形のいわゆる意味が矛盾しない時に、進行形が使われると考えられる。

- (7) a. He is being ill.  
b. \*He is being tall.

(7a) では仮病が想定されるが、(7b) ではそういうことができないので非文になると考えられる。一般に進行形をとりにくいとされる動詞が進行形と共に起する場合の条件として、次の二点を Leech (1971) はあげている。

(8) the time-span is temporary rather than permanent

(9) the verb may be construed as referring to an activity with human agency (p.26)

これは Hatcher の言う「明白・進展的活動か、主語が関与」ということ

にも相通じるといえよう。このような概念がどうして出て来るかといえばそれは「直接観察」という機能に戻ると考えられる。観察者の心にうつる或いは反映する進行中の動作が問題となる。しかも観察行為というのは、注意を集中するのであるから、ある特定の時間の幅をもって行われることとなる。

観察者の心の反映という主観的要素の他に、観察ということからの客観性という要素も十分考えられる。これは一見相反しているようだが、観察者の立場を考えればわかってしまう。それは、その観察された進行中の動作に対する観察者の心は、利害関係がからめば感情的色彩を帯びる。そして別の意味で、観察に集注徹する観察者は、観察という行為を通じて、第三者的観察に終始し、当然客観的となりうる。当事者が第三者かという立場の違いとなる。これは当然、発話のメカニズムそのものに由来するのであり、決して対立的なものとはいえない。従って、二種の観察者の立場が考えられることとなる。

長谷川（1973）では、進行形の意味を微分になぞらえている。これも「集注」ということに関連していると考えられる。ここでは、時間と空間の二次元座標を設定して論をすすめている。この点を入れて考えると、観察されるものは、時間軸方向と空間軸方向にのびるものの二方向が考えられる。つまり、時間的な広がりをもつものと、空間的な広がりをもつもので、一般的にはいわゆる temporary use と manner に関するものと考えられる。これはみな観察する過程で、その焦点がどういう要素に向けられるのかということに係わり、その注意の向け方如何により、進行形の様々な用法が出てくるものと考えられる。

次に少し時間的要素について考えてみたい。進行形によって表現される時間というのは、通常純粋な物理的時間というよりは、むしろもう少し心理的要素を加味したものである。つまり、観察者の眼もしくは意識を通した時間に他ならない。これは、単純形のいわば宙に浮いた様な時間とは対照的な、特定な時間、現実感のある時間と考えられる。つまり、始めもあ

れば終りもあろうという一種の限られた時間である。

(10) 'Oh' you have been living there ?

'Yes, for the last eighteen months. With an uncle. You see, he lives there and I've been living with him.' —AP

(10)に現われた *live* の単純形が Leech の云う 'permanent residence' を意味するのに反し、その進行形では 'temporary residence' である。つまり一時的な仮のもので、いつまでもいるわけではないという意識がある。それは、通常・特別とでもいう対立の中でとらえられるといえよう。長谷川(1973)でも次のような時間観をのべている。

(11) 進行形をとる動詞の指示する動作・状態と発話の時点との客観的な時間関係ではなく、話者の意識に表象された時間でなければならない。(p.3)

特定の時間、現実に根ざす時間ということは、始めもあれば終りもあろうという一種の限られた意味を伴いうるということは前にも述べたが、これは〈終りの意識のないもの〉との対比によって生きると考えられる。つまり、一時的一過性現象という意識が常に伴うこととなり、これは、動詞の性質に依るといふことの他に、意識し観察するといふことが絶えずベッタリとはできないということからも考えられる。つまり注意集中して観察できるのは、やはり限定された時間においてであるからと考えられる。しかし、その観察の焦点が限定された時間に向けられるのか、或いは早晚終りになるであろうということに向けられるのかは別問題である。ただ、そのうち終りになるだろうという予想はあっても、ある種のもの、実際どうなるかまでは定かではない場合も考えられる。これについては後でふれたい。

進行形の根本に直接観察ということすえて考えているわけだが、ここで少し毛利(1980)によって示された新しい方向での進行形研究、つまり意味論・語用論から考えた「進行形による〈行為解説〉」について考えてみ

たい。

- (12) 英語では行為AをBといいかえることによって〈Aの内容を解説〉する時、Bの部分に進行形が用いられる。 (p.115)

In saying S, he is doing B という公式をたてて説明をしている。たとえば、いわゆる performative verb である *promise* をとりあげて、

- (13) a. I promise.  
b. I am promising.

(b)の様に進行形をとると、先行の『〈発語内行為〉を「あれは〈約束だ〉」と〈命名〉しているのである。〈命名〉は〈行為解説〉の一種』として考えている。そして更に一般動作にまで拡大して考えている。この様な語用論的観点は、Hatcher にも performative verbs という名称こそ用いられていないものの言及があり、また更に遡れば、Van der Laan がその著書をしめくくる前に設けた一章にその萌芽をみることができる。

- (14) 進行形が動詞の意志的形式たることから、次にいかにして独特な断定的な或いは説得的な力を有するに至ったか… (中略) ……この種の進行形は、動詞の性質上通常進行形をとらないものの場合でも、聴者にある事実を深く感得させるために用いることが往々ある。 (p.222)

結局、行為解説ができるということは、観察すればこそ、その結果としてできる訳である。

ここで、少し整理する意味で、人称にわけて考えてみたい。発話のメカニズムを考える場合、発話者（ここでは観察者）と聴者そして話題に上っている人、そういう人間関係を見逃しては論じられないからである。

「I の二面性」<sup>2)</sup>という問題を別にすれば、第一人称主語能動文では、主語＝観察者という等式が成立する。つまり、自らの行為について自身が解説を行うということは、(15)(16)の様に、相手に自分の真意が十分伝わっていないのを懸念し、それを明示する時と考えられる。

- (15) Mrs. Moore, you are in India, I am not joking. —PI  
 (16) Kitty, can you play chess? Now, don't smile, my dear, I'm asking it seriously. —TLG

或いは自らの命題態度の宣言といえよう。そして(17)の様に発話の既得権の主張、(18)の更に進んで内容にまで立ち入る場合も考えられる。

- (17) Excuse me, Mr. McBryde, you cannot go on. I am speaking to the witness myself. —PI  
 (18) 'Heaslop, I'm telling them I'm against any show of force,' said the Collector apologetically. —PI

この様な自らの行為解説は、話者の意図等とも関連し、更に感情的色彩を伴うこととなる。

- (19) However, I wasn't begging. —DLL  
 (20) I'm being dreadfully lazy. —DN

主語が第二人称の場合は、主語＝観察される者＝聴者という等式が考えられる。聴者に聴者自身の行為解説を面と向かってするということは一体どういうことであろうか。

- (21) You are joking, Lizzy. This cannot be! —engaged to Mr. Darcy! —PP  
 (22) My dear Frederick, you are talking quite idly. —P

(21)の様にわかりきっているはずのことを殊更言い立てる場合と、(22)の様に相手にはわかっていないので実際に客観的にどうみえているのか教える場合とが考えられる。従って、そこには単なる行為解説の他に、事実確認的な話者の主張が含まれることとなる。つまり、問い質し、たしなめ、非難、叱責等を含意した話者の主張がある。いずれの場合にも、観察により〈現場〉を押しえているために、その発話効果が倍増する。

- (23) You're acting like a boy.' I broke out impatiently. 'Not only that, but you're rude....' —GG



- (24) *Are you forgetting your manners?* (This might be said to a child who has failed to perform a conventional act of politeness. It is a kind of reminder.) (Hornby, p.118)

次に第三人称の場合は、観察者の眼からの行為解説であるが、前述の二つの人称でみた様な特殊な等式関係はなく、比較的第三者的なものと考えられる。いわゆる主観的要素を含まない客観的観察の報告である。

- (25) 'Do come, Anne,' cried Mary, 'come and look yourself. . . . They are parting, they are shaking hands. He is turning away. . . .' —P  
 (25)の様な話者がいわば実況中継しているのもその一例といえよう。より客観的なものとして、(26)の様な無生物主語の場合が考えられる。

- (26) The quiet light in the houses were humming out into the darkness and there was a stir and bustle among the stars. —GG

しかし、発話意図或いは利害関係意識等がからんでくれば、やはり話者の主張が含まれる。(27)(28)にみられる陰口等その代表といえよう。

- (27) 'She was certainly intending to be kind, but I did not find her exactly charming.' —PI

- (28) But I don't believe it. They are only pretending to be shocked. —DM

ここで注目すべき点は、進行形は誉め言葉よりそしり言葉に多く使われるということである。これは、単純形が物事の本質をのべるのに反し、進行形が一時的特定のなことをのべるのに由来すると考えられる。良いことは本質的なものとして扱わない限り、誉めるつもりでも〈いつもと違って〉という含意のために却って皮肉になろう。けなし言葉の場合、それを特定の言うことは、本質論と比べて少し婉曲的といえよう。しかし、現場を押しえている点では、感情的色彩は強いものとなる。従って、話者の感情が高ぶってくれば、(23)の様に、進行形による批判の後、〈いやそもそも君は無礼者なんだ〉と単純形による本質論でとどめをさすこととなる。<sup>3)</sup>

さて行為解説は観察によってなされるが、その際二種の観察者の態度が考えられる。観察者の主観が入る場合と、入らない客観的な場合である。たとえて言うならば、評論家とニュースアナウンサーの立場であろう。勿論前者の場合に何らかの *illocutionary force* が含まれるのは、価値判断との関連からも十分予想されることである。主観的観察の場合、その評価の対象となるのは、行為そのもの、もしくは行為のやり方、様式であると考えられる。感情的色彩というのは、たとえていうなら、レンズで光を集めて白紙の一点に集中させていると、そこに黒煙が上り穴があくということであろう。これは、細江、長谷川の言う「低回性」<sup>4)</sup>ということにも通じる効果であろう。二次元座標を考えると、それは空間に向けられた眼と考えられる。その極端な例としては、例えば *always* 等と共に起る進行形が、‘persistent or continuous activity’ (Leech) として、感情的色彩を伴う場合が考えられる。

(29) ‘Every body is always supposing that I am not a good walker!’  
—P

(30) Bingley was sure of being liked wherever he appeared, Darcy  
was continually giving offence. —PP

ただ単なる時間的継起をとらえているというよりは、むしろそれをわざと超えて〈そういうもんだ〉といわば空間化してとらえている。わざとベッタリと感じている所に、たとえば目障りだ、迷惑だという現実感が結びついていると考えられる。また、そうすることにより、一層命題態度が強調されることとなる。

一方、客観的立場は、時間の流れに眼を向けていると考えられる。その典型的な例は、Jespersen の ‘time-frame’ theory であろう。

(31) He was writing when I entered.

(31) の様な *when* 節等で与えられた一点で、ある動作の進行を表わす訳である。そして結局は、時間的継起にそった観察の報告ということに行き着く

ことになろう。その極端な例が、進行形による丁寧表現で、これは、主観的要素を排除し、取消の可能性或いは予想ありという意味を活用し、相手に気分的負担をかけない表現である。この場合、自然な時の流れにくみこんで、その主観性を排除している点が重要であろう。たとえば、未来を表わす助動詞と結びついた場合を考えてみよう。

(32) I shall not be seeing you again. —MFL

(33) Will you be wanting anything else, sir? —GMC

(32)は、その意味で婉曲ないかにもレディーらしい言葉遣いといえよう。また(33)では、召使が主人に向ってという言葉で、押し付けがましさが無い。というのも、切口上ではなく、時の流れに沿えばこうなるがどうするか、それにのるかのかのらないかは相手の一存に依ることとなり、suggestion以上の効力をもたないためであろう。この二例は、相手に都合の悪い事良い事の違ひこそあれ、未来の助動詞と結びついた中立的な〈先取り〉表現といえよう。どちらも話者の意志的要素が排除されているのは進行形のためと考えられる。他には、今迄はこうだが後はあなた任せという場合がある。5)

(34) There is, as we have seen (§ 28), a notion of 'temporariness' and 'possible incompleteness' about the Progressive form, and in the present context, it is extended to 'lack of commitment.'

(Leech, p.24)

Leech (1971)でも言う様に、一時的でしかも未完了なのだから、これから先いくらでも予定変更できるということを援用し、相手に負担を感じさせない様にするわけである。Leechは更に例をあげて、過去進行形の方が、most tentativeだとする。

(35) We're wondering if you have any suggestions.

(36) I was wondering if you'd give us some advice.

それは、過去進行形の方が未完了ということをやより明示できるためと考えられる。従って、相手に何らかの迷惑をかけそうな時に使われる。

進行形の未来表現は、Leech (1971 : p.57) で *future event anticipated by virtue of a present plan, programme or arrangement* と詳しく論じられている。これも、観察者の意識では、既定の事として計画表に組み込まれたものと考えられる。従って、その時点では、既に話者の意志とは切り離された中立的なものである。だから、何かに誘われても、(37)の様に既定スケジュールを盾にとり、相手の気に障らない様な口実に使う場合も考えられる。

(37) I'm sorry, I'd like to have a game of billards with you, but I'm taking Mary out for dinner. (Leech)

また、観察者の意識ではそうと心積りができていても、何分相手のあることだから、自らの意志を前面に出さない場合もある。相手にとって悪くない話の時にでも、相手に遠慮なく承諾させる様配慮する時にも援用される。

(38) 'Good morning, old sport. You're having lunch with me to-day and I thought we'd ride up together.' —GG

(38)も、意志を切り離しているという点で一種の丁寧表現といえよう。一般に、意志を含んだ未来表現には、*be going to* が使われる。<sup>6)</sup>

(39) I am going to have my own way.

相手との力関係により、発話効果が異なる点も注意しなければならない。

(40) The Old Stonyface pronounced. "You're staying for dinner. That's an order." —LS

(41) "But, Jackie, you're *staying*."  
"Me? No, I'm not . . . ." —DN

同じ *you're staying* でも父から子への発話の(40)と、友人同士の(41)とでは、その *illocutionary force* が異なるのもわかろう。特に(40)では、話者自らが *order* と規定し強調している。一方、(41)では、即座に断られている。

以上、Van der Laan の直接観察ということを中心にして、進行形表現

について考えてきた。空間的観察と時間的観察との二種があり、前者は主観性をもりこんだ感情的色彩を帯びる。後者は時間の流れの中でみる、どちらかといえば客観性の強いものである。特に感情的色彩ということを考える場合に、相手にわかりきっているはずのことを殊更言いたてる、相手にはっきりわからせるとか、何らかの話者の意図や主張がからむこととなる。それは、悪く言えば、(42)(43)でみられる様に、現場を押しえたため可能となる。そして、多くの場合何らかの評価ということにも関連してくるために、主観的要素抜きにはできない。

- (42) 'Lizzy,' said he, 'what are you doing? Are you out of your senses, to be accepting this man? Have not you always hated him?'

—PP

- (43) Why must she be scampering about the country, because her sister has a cold?

—PP

一方、主観を排して、あくまで観察に徹すれば、中立的な客観的表現になると考えられる。この二種の観察ということが、表裏一体を成しているのが、従来の進行形論を混沌に陥らせた一因ではないだろうか。

進行形を考える際に、Van der Laan に立戻るということで何か逆行の印象を与えたかもしれない。しかし、単純形と進行形を並べた場合、特定の観察対象となるということから、単純形のもついわば宙に浮いた時間と対照的であるという意味で、進行形の持味がかなり明らかになったと思われる。まだ多くの問題を残したままではあるものの、これはかなりの展望があると考えられる。また、発話のメカニズムとの関連からも結局は旧くて新しい問題といえよう。

## 注

- 1) 旧字体は、適宜改めた。
- 2) 毛利可信。(1974)。「語用論の諸問題」英語青年二月号参照。
- 3) Norbert Hornstein (1977), 'Towards a Theory of Tense,' *Linguistic Inquiry*, vol.8, no.3 ; pp.522-3 fn. 参照。ここでは単純形が strong predication, 進行形が weak predication という説が紹介されているが、この意味でも説得的であろう。
- 4) 細江逸記 (1973) p.102 参照。
- 5) David Dowty (1977), "Toward a Semantic Analysis of Verb Aspect and the English 'Imperfective' Progressive," *Linguistics and Philosophy*, vol. 1, no.1 で主張されている branching time 或いは possible worlds との関連からも興味深い。
- 6) *be going to* にも徴候判断という、いわば客観的用法もあることにも注意する必要がある。She is going to have a baby.

## 参 考 文 献

- AP J. B. Priestley, *Angel Pavement*  
 PI E. M. Forster, *A Passage to India*  
 TLG Lewis Carroll, *Through the Looking Glass*  
 DM Henry James, *Daisy Miller*  
 DLL Jean Webster, *Daddy-Long-Legs*  
 DN Agatha Christie, *Death on the Nile*  
 PP Jane Austen, *Pride and Prejudice*  
 P Jane Austen, *Persuasion*  
 GG F. Scott Fitzgerald, *Great Gatsby*  
 MFL Alan Jay Lerner, *My Fair Lady*  
 GMC James Hilton, *Good-bye, Mr. Chips*  
 LS Erich Segal, *Love Story*

Allen, Robert L. 1966. *The Verb System of Present-Day American English*. Mouton.

Dagut, M.B. 1977. 'A Semantic Analysis of the "Simple"/"Progressive" Dichotomy of the English Verb,' *Linguistics*, 202.

長谷川存古。1973。「英語進行形の意味論」待兼山論叢6号。

- Hatcher, A.G. 1951. 'The Use of the Progressive Form in English—A New Approach,' *Language* vol.27, no.3. /笠井満訳。1959.『進行形の用法』研究社（英語学ライブラリー(35)）。
- Hornby, A.S. 1956. *A Guide to Patterns & Usage in English*. 岩崎民平注釈。研究社。
- 細江逸記。1973.『動詞時制の研究』（新版）篠崎書林。
- Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin.
- . 1933. *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin.
- 小谷晋一郎。1980. 'Intention, Plan and Arrangement Expressed by the Progressive' 『毛利可信教授退官記念論文集』。
- Leech, Geoffrey N.1971. *Meaning and the English Verb*. Longman.
- 毛利可信。1972.『意味論から見た英文法』大修館書店。
- . 1980.『英語の語用論』大修館書店。
- 太田朗。1954.『完了形・進行形』研究社（英文法シリーズ(12)）。
- . 1963. *Tense and Aspect of Present-Day American English*. 研究社。
- Palmer, F.R. 1974. *The English Verb*. Longman.
- Van der Laan, Jacobus. 1953.『動詞進行形の研究』（訂正版）斉藤静訳。篠崎書林。